

## ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (1)

——ガエターノ・モスカ——

氏 家 伸 一

### 訳者前書き

これは『シュモラー年誌』第五三巻五号（一九二九年）に発表されたロベルト・ミヘルスの「ガエターノ・モスカと彼の国家理論」の翻訳である。

ミヘルス（一八七六—一九三六）はモスカ（一八五八—一九四一）、プレート（一八四八—一九三三）と並んで、ネオマキアヴェリアンのトリオ（ヒューズ『意識と社会』と呼ばれ、現代エリート論の創始者として三人一組で扱われることが多い。（T. B. Bottomore “Elites and Society”, James Burnham “The Machiavellians”））三人とも前世紀末から

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (1) 氏家

今世紀初頭にかけて活躍した思想家で、ほぼ同時代人と云えよう。また三人とも、程度の差はあれ、思想運動としてのファシズムの生成に加担したといわれる。ただし、ミヘルスも言うようにモスカについては留保つきであるが。このトリオの中でミヘルスは最も若いということに加えて、彼はドイツ人であり、後イタリアに帰化したということ、ドイツでは社会民主党の左派に属していたということ、この二点で他の二人とは異った履歴をもつ。その意味でミヘルスはドイツとイタリアの思想的交流の仲介役をつとめる位置にあった（ヒューズ）。ドイツ語によるイタリア紹介という点でミヘルスは重要な働きをなしたといえる。（いうまでもないが、このモス

(七九五) 八九

カ論の発表された『シュモラー年誌』もドイツの雑誌である。ミヘルスも述べているように、パレットとモスカは一面識もなく、それどころかエリート論の先唱権をめぐっての論敵同士でさえあった。その意味でもこのモスカ論は、本誌次号に訳出する予定のパレット論とともに大いに歴史的興味をそそるものといえよう。ミヘルスは兩人と親しく交際していた。そのため、ミヘルスの他の同時代人論と同様、本論でもモスカの人物像が具体的に語られている。ミヘルスにはその『政党社会学』（一九一一）で示された実証的社会学者の面と、このような人物論にみられるジャーナリストとしての資質がある。両面は彼の中で交錯し合っている。

本論の思想的意味について若干のコメントを加えておくなら、(1) 先ず、これが一九二九年のミヘルス、つまりファシズムに同意したミヘルスの文章であるということが指摘されねばならない。分析の正当化にムッソリーニの演説を使っていることからそのことがうかがえる。(2) しかし、モスカのムッソリーニ批判の理由、粗野な反議会主義への反感と伝統的な西欧リベラリズムの指摘も注目に値する。ミヘルスが盲目的なファシストではないことを示している。(3) 冷静な批評眼はエリート論をめぐる論戦で、明確にモスカに軍配を上げ

ていることからもうかがえる。

ところで、本論でも中心テーマをなしているのは自由主義、民主主義、社会主義そしてナショナリズムである。(4) はっきり言えることは、ミヘルスもモスカも、そしてパレットも代議制民主主義の有効性を信じていないということである。ミヘルスの言葉を使えば、あらゆる政治的支配は「少数者支配」であるとする主張である。しかし、ミヘルスにはルソー流の直接民主主義へのこだわりがあるという点も忘れてはならない。(5) 自由主義的要素は、ミヘルスも述べているように、パレットよりもモスカに強い。ナショナリズムについてと同様、自由主義も貴族とのかかわりがあるとミヘルスはみている。(6) ナショナリズムの歴史的分析は重要である。その階級的基礎を探究する視点は評価されてよいし、ミヘルス自身の中に残るマルクス主義の残照といえるかも知れない。(7) 社会主義との関連では、モスカはソレルのサンディカリズムを知るべきであったとする主張が興味深い。何故なら、ヨーロッパ的規模で、フランス・サンディカリズムとイタリア・ファシズムとの接合を体现したのがミヘルス自身に他ならないからである。(8) 社会主義とナショナリズムとの結合という視点も重要である。これを先の階級的視点とどう調整するかがミ

ヘルス自身の思想的課題となる。

(9) モスカは完全にイタリアの現象であるミヘルスは断言している。今日、政治学の共有財産の一となった観のあるエリート論ではあるが、創始者たちのエリート論がイタリアという特殊な政治状況の産物であったという事実は看過すべきではない(『ジョル』ヨーロッパ一〇〇年史)。モスカとバルートの反民主主義はイタリア民主主義の現実を背景にしてみ理解できるということである。その意味でミヘルスの反民主主義は、ドイツとフランスとイタリアでの社会(民主)主義体験に基づいているだけに他の二人とは異った特色をもっている。この点の究明は別稿を待たねばなるまい。

ガエターノ・モスカと彼の国家論

Schmollers Jahrbuch L III 5. 1929.

目次 歴史的、教義史的序論——モスカの国家概念——民主主義と社会主義の論争——政治階級 *classe politica* の学説——イタリア近代史における政治階級——伝記的事項、第一期、トリーノ大学時代——政治的経歴——モスカと外国——結論

事物の科学はしばしば事物そのものに先行する。その見本を提供するのがイタリアの文化史である。拡大された統一

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (1) 氏家

経済領域を目論んだ重商主義の最初の偉大な代表者は、一六世紀末から一七世紀初頭にかけての分断されたイタリアの人々である。コルベール主義を擁したルイ一四世のフランスは、理論的には概ねこのイタリアの先駆者に負うところ大であった。イタリアは最悪の貨幣しか有してこなかったが、貨幣制度については最良の作品を有したとガニールは皮肉ることが出来たし、その皮肉の的確さをベッキョは請け合うことが出来た<sup>(1)</sup>。もしかしたらこの二つの現象の間には因果関係があったのかも知れない。同じことが政治学と国法論の分野でもいえるのである。この分野に関してイタリアには根強い伝統があったのだが、その偉大な理論的政治家達——その中ではマキアヴェルリ、ボテロ、バルータだけを想起しておこう——は、イタリア統一の夢の実現へと至るはるか二、三百年の間に生を受け、かつ教えを垂れたのである。

(一) Giuseppe Peccio, *Storia della Economia pubblica in Italia*. 3. Auf. Lugano 1949, Jip. della Svizzera Italiana, S. 44.

精神科学、国家学、社会科学においてイタリアの果たした役割はどんなに高く評価してもし過ぎるということはない。イタリアは教会哲学と経済哲学の創始者サン・トマソ、キリス

(七九七) 九一

ト帝国国の理論家ダンテ・アリギェリ、愛国的な革命独裁と現実政策的な国家技術の師マキアヴェルリを生み出した。ジョヴァンニ・ボテロと共に保守的な国家理性の学説が開始された。アントニオ・セラは、商業には貴金屬の天然資源を有しない国に豊かな繁栄をもたらすという使命があり、それは実行出来るのだという認識を告知した一連の重商主義者のさきがけである。トマソ・カンパネラにおいて、少くともヨーロッパ大陸では——イギリスの「トーマス・モア」にはおくれをとったが——プラトン以後初めて、人間の空想とユートピアに対する永久の権利と熱望とが強調された。スタニスラオ・マンチーニとその一群の弟子達は国民性原理の国家論によって、内政上の民主主義と分業的経済原理に匹敵する原理をうちたてた。それはフェツリ、ベッカーリア、アダム・スミスによって確立されたのと同じものである。

現代イタリアは政治学の分野におけるこの光栄ある伝統の軌道に忠実であった。ここでは外国でも知られている名前、ジョルジョ・アルコレオとジュゼッペ・レンシのみを——或る意味ではグリエルモ・フェルレーロも——挙げておこう。この一群の重要な理論家の頂点にヴィルフリード・パレート、そして疑いも無くガエターノ・モスカが立っているのである。<sup>(1)</sup>

(1) 今日イタリアではガエターノ・モスカがあらゆる文化史家によってヴィルフリード・パレートと同列に扱われているというよりは以下の著作から明らかとなる。Benedetto Croce, *Storia d'Italia dal 1871 al 1915*, 3a ed., Bari 1928, Laterza, p. 103, 141, 316, 323. & Giovachino Volpe, *L'Italia in Cammino. L'ultimo Cinquantennio*, Milano 1927, Treves, p. 155.

ヴィルフリード・パレートは、少数者の「永久」支配への貴族の不遜〔な要求……訳者補注、以下同じ〕に対してのみならず、直接的な、もしくはせめて間接的な大衆支配の可能性という民主主義の「お伽噺」並びに「残基」Residuum に対して、エリートの周流という教説を対置した。ガエターノ・モスカは雄篇『政治学要綱』*Elementi di Scienza Politica*——彼はこれを一九二二年に出た第二版ではほぼ二倍の大きさに仕上げることになる（パレートとはほぼ同時期もしくは少し前）——の中で、いわゆる政治階級 *classe politica* の不可欠性に依拠する国家、またその上に築かれた国家という教説を打立てた。<sup>(1)</sup>

(1) ありがたいことに、モスカの著者は、その第二版がカールスルーエのブラウンによって翻訳され、ドイツの読者の手に渡るはずである。

往時のイタリアの学問の大方の典型的特徴は、その総合へ

の志向、全学問の窮極的不可分性への志向にあった。それ故に折衷的とけなす向きもあったのだが、それは誤りである。

この特徴は既に、国民経済を道徳と政治の基盤として捉えはしたものの、文化を経済の拘束を受けない「最も複合的な現象」と呼んだ。ジャン・ドメニコ・ロマニョーシ(一七九一—一八三五)に顕著に現われている。地理学者のアルカンジエロ・ギズレリーが誇張して、全くのイタリア社会学である<sup>(1)</sup>と公言したこの人物の著作には、ヤコブ・ブルクハルトがイタリアのルネッサンス人に体现させたような精神が漂っている<sup>(2)</sup>。総合的把握への要求にもなった多面性も、長期にわたるイタリア学問の独得の世襲財産なのである。このような観点からみると、例えば政治家のマルコ・ミンゲッティが、法と経済と道徳との連関について著した(フランス語でも出版された)学術的著作(一八五九)も又価値あるものである<sup>(3)</sup>。ガエターノ・モスカも又総合への欲求を強くもっている。

- (1) Arcangelo Ghisleri, *Sociologia italiana*, in der *Rivista L'Italia*, vol. II, fasc. 4° (1919).
- (2) Jacob Burckhardt, *Die Kultur der Renaissance in Italien*, Leipzig 1877, Reemann. Bd. I, S. 166.
- (3) Marco Minghetti, *Les Rapports de l'Economie Poli-*

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (1) 氏家

tique avec le Morale et le Droit, avec introduction par Hippolyte Passy. Paris 1863, Guillaumin.

## II

国家学の分野ではモスカはイタリアにおける保守的潮流の領袖と呼んでよからう。といってもドイツにおけるユーリウス・シュタールとかフランスにおけるルイ・ブイヨのような意味でそう呼ぶのではない。そういう意味でなら、ド・ボナールやド・メーストール兄弟との繋がりの方が先に指摘されてしかるべきである。そうではなく、彼の保守主義はむしろピールコンズフィールド郷(「ディズレーリ」のようなイギリスの保守主義と共通しているのである。ここでいうイギリス保守主義とは、即ち、モスカの場合と正しく同様で、貿易政策において保護関税には原則的に反対し、自由貿易の趨勢に忠実な方向のことである。確かに、自由民主主義的なイタリア社会では、モスカをほとんど反動的なアウトサイダーとみなすことも出来た。一九一三年ジョリッツイ内閣の下で普通平等秘密選挙権が認められた時、モスカはそれに反対表明をした、国会におけるたった一人の議員であった。

十年に及ぶ深い研究、同じく長期にわたる実務経験の間に

(七九九) 九三

熟してきた、政治学の特質に関するモスカの理論は、あらゆる歴史的時代、あらゆる民族の生活領域から取り出された膨大な資料群を擁し——ここでは、近代的国法並びに近代的国家技術と密接な関連を有する古典古代がとりわけ大きな部分を占めている——、適切な所見を驚くほど豊富に提示している。それらは著者の豊かな歴史的知識とともに卓越した観察能力を示し、小気味が良いほどである。

モスカの国家概念は歴史的であると同時に倫理的・主意思義的である。モスカは国家を、民族の発展における暴力的な初発の現象とみなしてはいるが、その道義的、教育的使命を強調している。しかしながら彼は、国家を、中立的な裁判という使命に没頭し、絶対的純粋性の故に諸政党と社会諸階級を超越している一種の超越的存在とみなす法学者や社会学者の科学的見解には決して与しない。ガエターノ・モスカに依ると、政治体制及び国家体制の貴族制と民主制への分離、曾てのアリストテレスの分類もまた誤りである。何故ならばアリストテレスが民主制と称したものは若干拡大された貴族制以外の何物でもないからである。<sup>(1)</sup>イポリット・テースヤルー・ドヴィツヒ・グンプロヴィチのような<sup>(2)</sup>、彼が先達と承認している年上の著述家に依拠しつつ、多くの点で彼らを体系的に

も理論的にも凌駕しながら、モスカは国家の核心を、彼が少数者の組織、もしくは政治階級、即ち国民の政治的業務を担当する階級 (*classe politica*) の台頭と呼んだもののうちにみている。従って政府は断じて市民の多数派の表現ではなく、それは常に、伝統的要因と経済的卓越、さらには狡猾と知能とにおいて抜きん出た、力と野心のある少数者の手の中に存するのである。それ故大衆の統治というものは存在しえない。民主主義とは事物というよりも言葉に過ぎない。当然ながら少数者支配は必ずや道義的外被をまとうて登場して来る。それは自らの支配の正当化に役立つ理論を創造する。しかしまさしくそれ故に、その理論は、自覚するしなやかかわらず、かたよった性格をもつことになる。この範疇の理論には、絶対王制における王権神授説と同様、民主主義の基礎となる国民主権論もまた属するのである。

(1) Elementi, p. 54.

(2) ゴットフリート・ザロモンがグンプロヴィチの影響範囲を簡潔に述べている興味深い序文には一つつけ加えることがある。

モスカは疑いも無く、このポーランド人社会学者のイタリヤにおける独創的な弟子なのである。U. Gumpłowicz, *Ausgewählte Werke I: Geschichte der Staatstheorien. Einleitung*. Innsbruck 1926.

モスカは社会主義を、民主主義的ユートピアを国法と哲学の分野から社会科学と経済学の分野へ翻案したものとみなしている。モスカに依ると、人間の国家的共同生活の根本法則は、最も凄惨で過激な革命でさえも何ら変えることは出来ないものである。サンキュロット支配時代のフランスを旅行したイギリスの経済学者アサー・ヤングは日記に書き残している。やむを得ないがその通りなのだ。即ち、一人の悪者が物を書くこと十万人の愚か者がそれを信じてしまう、と<sup>(1)</sup>。もしもモスカがフランス大革命の時代に生きていたとしたなら、彼も同様に考えたことであろう。ヴィルフリード・パレートはその辛辣と偏執によつて（逆にモスカの温厚な人柄とその人間と政治の実際に関する豊富な知識によつて）モスカと区別されるのだが、それはさておくとして、純粹な思想内容を組上に載せてみるなら、モスカも又、一九〇三年に出された社会主義諸体系 *Les Systemes Socialistes* に関するパレートの著作とほとんど同じものを書くことが出来たであろう。ところでこの二人の学者の間には——因みに兩人には個人的な面識が全く無かった——、我々の学問の歴史においては残念ながら稀ではないことなのだが、先唱権をめぐる争いが生じた。永い間ヨーロッパの学界では、ローザンヌの教授の

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (1) 氏家

少最者〔支配の〕理論の方がモスカのそれよりもよく知られていた。その理由はいくつかある。一つは、パレートがその書物の多くを、一般的に使用頻度の高いフランス語で出版したということ。もう一つは、ある種のスノビズムのためにイタリア人は、同国人の手になるといつてもアルプスの彼方から入った来た著作、もしくはそこで、とりわけフランスかドイツで少なくとも検印を受けた著作に専ら注目する傾きがあることである。さらに、惜しいことに数年前死去したセリニの学者が若い研究者の世界に及ぼしている影響は今日のイタリアでは絶大なのである。ムッソリーニの師<sup>(2)</sup>といつてもよい彼が晩年ファシズムに与したという事情は、当然ながらこの影響力をいや増すことになった。しかしながら、エリート論に関する根本思想の歴史的先唱権がパレートではなくモスカに属するという事実に変りはない。といつて、その際我々は剽窃のようなことを考えているのでは毛頭ない。しかも歴史の教える様に、連想はしばしば別々の頭脳に互いに独立に思い浮ぶものであるからなおのことである。もう一つ理由がある。つまり、結局のところ、二人の思想家の先駆者の数は非常に膨大な数にのぼるということである。ここではその中からたった一人だけ、しかも珍しいことにモスカもパレ

(八〇一) 九五

トモ言及していないイタリア人の名を挙げておらぬ。ヴェンチンツキ・シヨレルテヌは専らロマンヌの資料に基づいて既に一八五一年、政治的な多数決原理に対して、短くはすばらしく批判を加えておいたのである。<sup>(25)</sup>

(1) Arthur Young, *Voyages en France pendant les Années 1787—89 et 1790*. 2. Aufl. Paris, Buisson, Ed. I, S. 448.

(2) Gino Borgatta, *L'opera sociologicae le feste giubiliari di Vifredo Pareto*. Torino 1917, S. T. E. N.; ferner die Festschrift: *Jubilé du professeur Vifredo Pareto 1917*. (publié par Université de Lausanne). Lausanne 1920, Impr. Vavdoisse; Umberto Ricci, *Politico ed Economia*, Roma 1919, La Voce. — Vgl. auch die Pareto-Rummer des *Giornale degli Economisti*, Januar 1924. (Rom) mit Artikeln von Pantaleoni, Gide, Schreiber dieses u.a.;

Alberto Cappa, *Vifredo Pareto*. Torino 1924, Gobetti, 86ff.;

Luigi Strati, *Il Fascismo osservato attraverso le Teorie di Vifredo Pareto*, in der Zeitschrift *la Vita Italiana* (Rom), XIII. Jahrg., Heft CL/CL II.;

Robert Michels, *Vifredo Pareto*, in *Bedeutende Männer Leipzig 1926*, Quelle & Meyer, S. 119—139.

(25) この点については S. H. Bousquet が異議をなすべておる。(in: *Vifredo Pareto, sa Vie et son Oeuvre*. Paris 1928,

Payot, S. 189ff.) といつても明らかた不十分なやり方で。何故なら、ハレーナには時折マキシムまでも批判することがあったという事実(それは彼の当然の権利であるだけではなく、彼の批判的性格にも見合っていた)は、彼のマックスローニー・マックスローニのうちハレーナは、偽守護神である民主主義を打ち倒す騎士ゾオルクをみていた——の体制に対する根本的は認を払い去ることは決して出来なからである。そのことについて本稿の筆者は、私的な交換書簡からいくつかの資料を提供する<sup>(26)</sup>ことが出来ぬ。

(26) Vgl. auch Gaetano Mosca, *Piccola Polemica*, in der Zeitschrift *La Riforma Sociale*, XIV, Jahrg., XVII. Bd., Heft 4.

(27) Vincenzo Gioberti, *Del Rinascimento civile d'Italia*, Torino 1851, Bocca Bd. I, S. 127 ff.

モスカは彼の著作の中で民主主義と社会主義とを度々等置してゐる。確かに社会主義が民主主義から直線的に成長してくる<sup>(27)</sup>ともありうる。たゞ、自動的だ、かゝり初めから「議会主義的だ」ではないとしても。しかしながら、モスカが社会主義と民主主義とを等置する場合、社会主義の中には民主的潮流のみならず、明確に反民主的な少数者「支配」的な潮流も存在するという事実を忘れてゐる限り、社会主義を正しく扱つたことにはならぬ。



革命的労働者階級が政権を引き継いだとしても、そこには寡頭制的な化石化という危険性が潜んでいるであらうといふことは、夙に、とりわけアナキストが認めていたことであるし、社会主義者の通例的認識でもあった。早くも一八七二年に、後で有名になった、マツィーニに対する論難書の中でバクレーニンはこう詳説していた。人類の本性というのは、悪をなす可能性、虚栄、野心、貧欲にふける可能性だけからして既に、人間に道義の一切を忘却せしめるには充分であるようにできている、と。「我々は確かに真摯な社会主義者であり革命家である。ところで、たとえひとが我々に権力を引き渡し、我々がそれをたった数週間でももちこたえることが出来たとしても、我々は現在の我々以上のものにはなりえないであらう<sup>(1)</sup>」。従つて、社会主義者は、国家権力の奪取が奪取者に及ぼす性格改造力に対して、どの流派も理論的に盲目である、というわけではない。モスカの著作の夥しい個所からわかることは、たとえ社会主義の理論家のことをよくは知らないとしても、彼も又、上に示した改造力を完全に評価するすべてをこころえていたといふことである。それだけに、彼がジョルジュ・ソレル及び現代フランスのサンディカリズムと対決していないのは彼の不作為の罪といふべきである。

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(1) 氏家

(1) Michail Bakunin, *Il Socialismo e Mazzini*, 4. Aufl., Roma-Firenze 1905, Serantoni, S. 22.

社会主義とは社会民主主義のことではない。たとえ議會主義が制度として社会主義を実質的に形づくり、しかも、元々国家と国家秩序への意志としての政党概念と政党運動からして既に容易に民主的デマゴギーへと導いていくように、議會主義が社会主義を脱道徳化してきたとしてもである<sup>(1)</sup>。さらにもう一つの観点にも言及しておかねばならない。政治的社会主義は躍進するにつれて、人民支配としての直接民主主義からますます遠去かり、代表制へと流れこみ、選挙から生じた被選挙人の選挙人に対する支配を意味するポナバルティズムへと近づいていく。窮極的には指導者も常に承認している大衆の無能力が、指導者の事実上の支配を理論的にも正当化するために動員される。トーマス・カーライルが英雄論を唱えたイギリス、その英雄論が、イタリアやフランスでのように史的唯物論によつて社会主義の公式から完全には払拭されなかつた他ならぬイギリスにおいては、マルクス主義者でさえ公然と、再建される民主主義は慈悲深き専制に似てこざるを得まい、彼には活動の手引書と自らの意志を実行すべき力がある、と表明したのである<sup>(3)</sup>。あらゆる管理業務、戦術

(八〇三) 九七

的、行政的業務において、決断のため専門の知識を要し、執行のために権威を要するところではどこでも、ある程度の独裁が、従って民主主義の原則からの逸脱が必然的なのである。それは、民主主義の観点からみるなら一つの悪であるかも知れない。しかしそれは政治的必要悪といつてよい。社会民主主義とは、すべてを国民によって、ではなく、すべてを国民のために、を意味するに過ぎないのである。<sup>(4)</sup>

- (一) Robert Michels, *Psychologie der antikapitalistischen Massenbewegungen*, in *Grundriss der Sozialökonomik*, IX, 1, Tübingen 1926, Mohr, S. 321 ff.
- (二) Robert Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie. Untersuchungen über die oligarchischen Tendenzen des Gruppengebens*, 2. Aufl. Leipzig 1925, Kröner (siehe das Kapitel: Die bonapartistischen Teologie, S. 270—281.)
- (三) James Ramsay MacDonald, *Socialism and Society*, London 1905, Independent Labour Party, Ed., S. 16—17.
- (四) Ernest Belfort Bax, *Essays in Socialism New and Old*, London 1906, Grant Richard (Chapter: Democracy and the Word of Command, S. 174—182).

ところでモスカは、社会主義の中に指摘できる、民主主義に対する批判的考察様式の豊かな端緒をあまりに看過してい

るのだが、それに反して史的唯物論に対しては、彼は含蓄ある分析と批判を加えている。彼が唯物論的歴史把握を攻撃した周知の論拠と共にもう一つの興味深い言及に触れておいてもよからう。それは、一五世紀イタリアにおける、イタリア人の自活都市の領主的支配 (signore) への転換は、それに対応しそれに先行する経済的基本状態の変化が全く無しに実現したというものである。<sup>(1)</sup>

- (一) Mosca, *Elementi*, S. 450.

モスカの見解によると、たとえ支配階級は将来も存在するであろうし、また存在せねばならぬとしても、支配階級は堅固な性格を示すことはない。何故ならその構成員は、以前は社会の下層階級に属していた分子の不断の流入によって、絶えざる変動にさらされているからである。にもかかわらずモスカがパレートや他の人々の導入したエリートという表現を拒むのは、支配階級は常に道徳的に卓越した者の選択に立脚しているとは云い難いからであるとされる。<sup>(1)</sup>しかしそれは全く誤解に基づいている。というのも、パレート本人も決してエリートという言葉に道徳的な含みをもたせてはいないからである。モスカは、部分的には妥当な根拠に基づいて、支配階級はその任務を正しく果しうるためには経済的に恵まれて

いなければならないという命題を擁護している。<sup>(2)</sup> 正当にもモスカは、君主制的元主に必要な資質を考究した際、彼の任務の客観的な認識に必要な、隣人に対するある程度の冷静さと客観性<sup>(3)</sup>とに注意を喚起している。「決して人間に愛着をもつてはならぬ」とルイ一四世は、スペインの王位に就いた孫のフィリップ・ド・アンジュー<sup>(4)</sup>「フェリペ五世」宛にもたせてやった訓令書に書きとめた。もしかしたらこのような民主主義の扱い方が推奨さるべきかも知れない。何故なら、周知のように、まことに民主主義こそは、とりわけ人間に対する過度の愛着の傾向、即ち、あらゆる種類のネポティズム、差別的寵遇、高級官僚職を与党のメンバーによって満せうとする<sup>(4)</sup>ことに示された傾向を有するからである。

(1) Mosca, Elementi, S. 459.

(2) Idem, S. 434 ff.

(3) Idem, S. 108.

(4) Bollaire, Le siecle de Louis XV. (Ed. Paris 1856, Bry, S. 207)

社会的、社会教育学的意味で意義深くかつ興味深いのは、道徳的にも国事のうへでも等しく必要な徳、心からの誠実、個人的な勇氣等々を支配階級に教え込むことについてモスカ

が詳しく論じている部分である。<sup>(1)</sup> 彼は、政治階級が自らの倫理的な指導者資質を失わず、かつ、権力のもつ危険な変形傾向を逸れるためにも温情溢るる言葉は必要だと考えている。彼の内部では倫理家と歴史家、人間が政治にかかわるということは悪魔の道に踏み込むことだと繰り返し認めなければならぬ歴史家とが常に相克しているのである。

(1) Mosca, Elementi, S. 434 ff. u. 459.

\* \* \*

一九世紀の政治生活の重要な付随現象は、モスカの政治階級論にはうってつけの材料を数多く提供してくれた。ここではそのうちの二つを暗示するにとどめたい。

一つは民主主義を雄弁に論駁し、他の一つはエリートを同じく雄弁に弁護する。

世紀の変わり目頃の民主主義者にとって、貧困は貴族主義的体制の表徴以外の何ものでもなかった。ヴェネチアのヴィンチエンツォ・ダンドローはフランス革命の理念の熱狂的な支持者の一人であるが、自らの見解として、貴族制とは常に、一方に於ける富の集中、他方に於ける貧困の集中を意味すると宣言した。その際は彼は貧困を、社会がそれを奪い取れば必ず貧者は死に至るほどの微量「の財」と定義している。

「一方には可能な限り最大限の富を、他方にはそれ以上は奪い取れないだけの財を。」このような状況の下では、近代民主主義の父、ジャン・ジャック・ルソーが、一握りの権力者と富者が人間社会の頂点に君臨し栄華の極みをつくし、他方大衆は暗闇と悲惨のどん底をはいつくばっているという事実を「相対的」効果の原理——それによると、前者は、後者がそれらを奪われているその程度で享樂物を評価する——の帰結としてのみ通用させようと欲し、富者は富を所持していても、民衆が惨めであることを止めた途端、幸福であることを止めるであろうと主張したとしても、それはあまり慰めにはならなかった。<sup>(2)</sup>ともかく民主主義は貧困をさほど芟除しなかつたために、世紀の前半には、正にイギリスやベルギーのように民主主義が完成をみ、何ものにも妨げられずに支配しているところで、工場労働者の悲惨は最高度に達したのである。<sup>(3)</sup>イタリアほどに、この事態が強烈な、民主主義に不利な印象を残したところは他にはない。

(1) Vincenzo Dandolo, *Les Hommes Nouveaux* etc. 2-Aufl. Paris, an VIII, Fayolle, S. 304.

(2) Jean Jacques Rousseau, *Discours sur l'origine et le fondement de l'égalité parmi les hommes.* (Paris, 1903,

Bibl. Nat., S. 128/129.) [岩波文庫、二二四頁]  
 (3) 参照: 拙著 *Die Verelendungstheorie. Studien und Untersuchungen zur internationalen Dogmengeschichte der Volkswirtschaft.* Leipzig 1928, Kröner, S. 24.

ヨーロッパの民族独立の闘いに精神的に、また物質的にさえ参加したのは、実際には概ねブルジョア層に限られていた。今日ではプロイセン人でさえも、とりわけ世界大戦開始時のドイツ人の本物の一致団結と戦争への熱狂に比べれば、一八一三年、プロイセンの民衆はまるで一人の男のように奮起した、という評言などは無邪気な愛国的伝説であると公言している。それとは逆に、一八一三年に参加した民衆はわずかであったし、しかも容易には高揚しなかつたのである。<sup>(1)</sup>辺境のブランデンブルクからは、国民総動員を告げる警鐘に従おうとはしない男たちを戸口から追い出したのは女たちであったと報告されている。<sup>(2)</sup>おそらく当時のプロイセン人の中で独立への衝迫にとられたのは、実質的には知識人、或いは広義の教養人のみであった。<sup>(3)</sup>同じ現象は、イタリアの独立闘争(一八一三—一八六〇)にもみられる。祖国の概念それ自体の貴族主義的性格については、既に一七世紀初頭、偉大なナポリの哲学者ジャムバッティスタ・ヴィーロが確認していた。ポ

ーダンに対する論駁の中で彼は、初めに国家形態と統治形態とを区別し、次いで、ローマ共和国を取り上げ、それは形のうちでは人民的であるが、統治形態では貴族主義的であったことを証明しようとしたのだが、これをもとに彼は、祖国概念の貴族主義的、少数者の性格を確証しようと試みた。共同体は元々貴族と平民 *Patres et plebem* とに分割されていたのであり、本當の祖国 *patria* とは一握りの貴族 *patres*、世襲貴族 *Patrizien* とその利害の集合のことである、と。従って祖国 *Patria* 並びに貴族 *Patriziat* という概念とその本質とは、社会学的には同一の源泉から由来してきたのである。イタリヤ・リソルジメントの愛国的熱狂や祖国のための行動意欲は全く教養ある貴族によって担われた。独立闘争の中心にはイタリヤのブルジョアジーがいた。しかも実業人よりは知識人、就中、大学教授と学生の階層が多かった。それに貴族と都市手工業者の相当部分が加わった。「人民」大衆は傍観するか、特別の緊急時に一時的興奮にかられて行動をおこし、しかも反動的意味をもつ行動へ向かうことも同様に度々であった。民衆に同情的で彼らの窮乏化を防ぐための措置についても発言していたジョヘルティはこう考えていた。ブルジョアジーは民衆から多くを学ぶことが出来るが、ただ一つ、祖

ロベルト・ミヘルスの同時代人論(1) 氏家

国愛だけは学ぶことが出来ない<sup>(5)</sup>、と。ピサカーネのようなブルドン派社会主義者は、イタリヤ人民の下層階級の無関心を克服するために、社会主義によって獲得しうる愛国心、愛国心によって獲得しうる社会主義、このような二重の意味での、社会主義と愛国心との統合という独創的計画を構想していた。ピサカーネの考えでは、イタリヤの独立は、運動が平地にまで及んだ時初めて達成されるのである。イタリヤは、農民が自主的に鋤を剣に持ち替えた時に初めて勝利するであろう。しかし、この目的を達するためには、農民を奮起させる術を心得ていなければならない。祖国と名譽は彼らには無縁の概念である。おまけに彼らの胸の内には、戦争の結果がどうあれ、隷屬と耐えられない経済的圧迫という運命に変わりはないであろうという抗し難い思いが焼きついている。彼らを戦争に向けて持続的に高揚させておくためには、従って、理念的な目標設定と共に物質的な目標設定、祖国の解放と共に彼ら自身の解放という目標設定が必要となる。しかしながら、この具体的な目標は社会主義でしかあり得ない<sup>(6)</sup>。

(1) Lucia Dora Prosl, Preussische Prägung. Berlin 1915, Fischer, S. 46.

(2) Gertrud Bäumer, Weit hinter den Schützengraben.

Jena 1916, Diederichs. S. 12.

(c) Frost, idem.

(4) Giambattista Vico, *Principi di Scienza Nuova* (Milano 1831, Truffi, S. 80 bis 100). Deutsche Ausgabe, München 1924, Allg. Verlagsanstalt.

(5) Gioberti, *Rinnovamento*, I. C. Bd. II. S. 272.

(6) Carlo Pisacane, *Saggio sulla Rivoluzione*. Bolyna 1894 (1. Aufl. 1858/60), Treves. S. 144.

しかし歴史は愛国者の示したのとは別の道を進むことになった。実際のイタリア統一は、いわばあらゆる種類のプロレタリアートの頭越しに、必ずしも圧倒的な数とはいえない学者とその支持者たちの粘り強い根気と勇氣によって成就したのである。

(1) ヘント・ムッソリーニも一九一三年七月一五日の議会演説で述べている。「イタリア・リソルジメントはイタリア人民の努力「の賜物」であるという、尊敬すべきアレッシオ君のもう一つの断言は皮相なものである。残念ながらそうではなかった。イタリア人民は、ほとんど大部分参与せず、敵対的であることも一度や二度ではなかったのだ。」(Benito Mussolini, *La nuova politica dell'Italia. Discorsi e Dichiarazioni a cure di Amedeo Giannini*, Milano 1923, Imperia, S. 219).

\* \* \*

これは祖国統一実現後若い知識人の中の比較的思慮深い者

が受ける強力な歴史的事実教育となった。確かに彼らの多くは、一見大衆支配から生まれたかのような議会主義の創設期に捉われ、未だに今日性を喪わないついこの前の理論、即ち偉大な民族運動の少数者性、お望みならエリート性を印象的な言葉で誇示した理論のことを忘れてしまった。しかしながら我々の見た如く、ガエターノ・モスカはこの範疇の知識人は属さなかったのである。

\* \* \*

ガエターノ・モスカは一八五八年四月一日パレルモに生れた。彼はかの、健全で徳に厚く、質素な生活習慣をもち、高邁な家族の理念に満された教養あるブルジョアジーの階層、統一イタリアの歴史の大部分がその双肩にかかることになった階層の出身である。おまけに彼はシチリア人でもある。換言するならば彼は、イタリア全土で初めて一種の憲法生活(一八一二年国民の名において議会で制定した憲法によって)が花開いた一族、しかし他方で貴族、即ち男爵がイタリア全土で最も長い間、ブルジョアジーとは接触せずに特殊な階級的地位にとどまり、ブルジョアジーの方はゆっくりとよるめきながら我が道を歩んできた、そのような一族に属しているのである。<sup>(1)</sup>

(一) Rodolfo Di Mattei, *Cultura e lotta politica nel Settecento italiano*, in: *La Citica Politica*, Anno VI, fasc. 7, 25 luglio 1926, S. 273.

モスカは高校卒業後大学の法学部に入學し、一八八一年に卒業した。それからローマに赴き、高等行政学院 *Scuola Politica Amministrativa* の本科 *corso di perfezionamento* に進んだ。(一八八一／八二) 彼は一八八三年、二四歳にして既に『統治「及び議會政治」に関する理論』(國家論) *Teorica dei Governi [e governo parlamentare]* を發表し、これはオットー・ギールケやマルコ・ミンゲッティのような人々の好意的な関心を引いた。そして一八八五年、故郷のパレルモ大学で必要な試験に合格し、国法学の教授資格を得た。

だが首都の活気に溢れた政治生活はいつもモスカを強く引きつけていた。おまけに、大学に教職を得るために必要な長い待機期間は、財産の無い若者にとって、副業も無しにはやっつけられないものだった。そこで彼は一八八七年、申し入れのあった公式の議會議事録編集 (*revisore resonista parlamentare*) の仕事を引き受けることに決心した。多くの点でこの一步は意味深いものであった。先ず、若い知識人の精

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (1) 氏家

神的才能には不足のこの地位を引き受けたということは、彼の学究的経歴の突然でしかも一二年も続いた中断を意味した。それは、曾てマキアヴェルリも長い間書記として働いたのだという思いによつてようやく耐えられる底の苦痛に満ちた断念であつた。しかし曾てマキアヴェルリが一つの公職から爲したのと同様に、今やモスカは、長年にわたる議會討論の傍聴、読み直し、要約の作業から、人間と事物、民主主義的言動と議會手続き *ingranaggio parlamentare* についての豊かな経験を積み重ねたのである。

この期間(一八九五年)に上述した『政治学要綱』の第一版が出来上がった。

この労作は遂にその著者に、學究生活という約束の地への復路を開くことになつた。この書物の出版(一八九六年)の一年後、モスカはビエモンテの(「トリノ」)大学への招聘を受けた。トリノにおいて、今までそうたびたびローマを離れたことの無かつたこの生粋のシチリア人に新しい世界が開かれたのである。当時のトリノはまだ工業人口を抱えたフイアットの町ではなかつたが、といつて、もはや、戦間に習熟した貧しい貴族、無能者 *travets* と呼ばれた官僚団、そして有能だがいささか新しがり屋風に近視眼的で、政治的にも

(八〇九) 一〇三

言葉のうえでも狭いピエモンテの小宇宙に執着し、小市民的物腰を身につけたブルジョアジーのいる町、閉鎖的で、上品だが不服そうに自らの内にとじこもり、政治的に見放された旧王都でもなかった。トリノーはもはや、一四六九年から一八六〇年の間のように、当初は貴族主義的国家の、次いで自由愛国主義的軍隊を擁し、上昇を続ける国家の中心地ではなかった。ピエモンテ公国、サヴォイア公国からシチリア王国を経てサルジニア王国へと至る名称の変遷は指導的なアルプス山麓の人には手を触れなかったものの、それは質的というよりは量的な発展でしなかった。トリノーはまた統一イタリアの首都でも、上級裁判所と主務官庁の所在地でもなかった。八四年のその遷都に際しては少なからざる血が流され、深い精神的苦痛を味わうことを余儀無くされた。モスカが家族と共にトリノーに移り住んで来た時、この古いピエモンテの州都は、政治的にも社会的にも激しい変動にとらえられ、あらゆる新しい時代の波に洗われていた。それは概ね、優れた作家エドモンド・デ・アミーチスが一八九六年、トリノー人をスケッチした非常に心暖まる小説『みんなの車』Carrozza di Tutti の中で描いた通りである。既にして路面電車 (la Carrozza di Tutti) は、それまで市区毎にはばばらに住ん

でいた人々を興奮させ、ごちゃごちゃにかきまわし、前代未聞の人間関係と交際へと駆り立てていたのである。なるほど社会主義と現代的な社会問題の発生は、平均的なその乗客には、まだ危険で不興な新現象と映ってはいた。しかしそれらは確かに存在し、この一八世紀の都市——その改築には、ヴィットリオ・アメデオの偉大な親戚でもあるヴェルサイユのルイ一四世の園芸家ル・ノートルの構想が生かされた——に広がり始めていた。新しい工場施設と新党結成は互いに作用し合って、もともとワインとリキュールの町、イタリアの流行服、既成服産業の所在地として、進んで変革の役割を果そうとするこの町に、新生活——それが新しい矛盾という附随現象を伴うとしても——をもたらすことになった。

当時トリノーの大学は隆盛をきわめていた。世紀の変わり目頃のイタリアの大学ではトリノーのアルマ・マターが王座を占めていた。ここでは、倦怠と恐怖という精神物理学の現象について画期的な研究調査を行ない、アルプスの彼方への学問的浸透に成功したアンジェロ・モルソが教鞭を執り、チェザレ・ロンブローゾは犯罪と生物学的、身体的特徴との関連 (先天的犯罪者 *il Delinquente nato*)、天才と狂気 (Genio e Pazzia) との関連について教授してつた。



重要なベシミスト、アルトゥーロ伯が詩作をしながら教壇に立っていた。さらに刑事裁判官エミリオ・ブルーザ、経済学者で社会学者のサルバトーレ・コネットティ・デ・マルティースが講義していた。デ・マルティースはイタリアで初めて、大きな政治経済研究所 (Laboratorio di Economia Politica) を設立することに成功したばかりであり、その優れた組織力と教育力によって多数の有為の青年——その多くは後に名声を博することになった(ルイージ・エイナウディ、ジュゼッペ・プラート)——をそこに集めていた。

モスカは一八九六年、憲法学 (diritto costituzionale) の助教授として招聘された。二年後正統授に昇進した。ところが同僚のコネットティ・デ・マルティースの重病期間(一九〇〇年)と、彼の死後、長い間懸案事項だったが、後任としてバードヴァからアキッレ・ロリーアを招くまで(一九〇二年)、彼は学部から経済学の講義も任せられた。モスカは狭義の経済学者ではなかったが、モンテトリオにおける経済学論争の記憶並びに社会学と歴史の学識によってよくその任を果すことが出来た。彼がここでも既に、自らが断然保守的であり、あらゆる形の社会主義に敵対的であることを証したことは勿論である。自由労働組合 Unione Liberale で行な

った講演の中で彼は労働組合を否定した。たとえ団結権そのものは否定しないとしても、その系であるストライキ権は否定したのである。

同時に、自らの貴重な時間を浪費することなく、しかも断固として一般的教養という目的を自由に追求するガエターノ・モスカの才能はピエモンテ人の夙に認めるところとなり、彼は、当時ピエモンテ美術館にあったトリノ文化協会 Società di Cultura の会長に就任し、科学と文芸の講演会を主催する最大の知的クラブを統括したのである。彼は土曜の夕べは、ソルフェリーノ広場のカフェ・ボア(フィオリナー)にある同僚グループの常席テーブルを囲み、トーヴォ兄弟、エイナウディ(彼とはすぐに生涯の友情で結ばれることになった)、プラート、マンツィーニ、オットーイノそして本稿の筆者等様々な精神的、学問的傾向の人々と共に時間を過したものである。

しかしガエターノ・モスカにとって最も重要な精神科学上の実験室となったのはレニャーノ通りにあるロンブローゾの家であり、毎日曜日、彼は、そこで特別歓迎され、重んじられる客となった。私は、ロンブローゾの家がイタリアとヨーロッパの精神生活にとっても意義を別の所で詳しく述べて

おいたので、読者にはその個所の参照を求めざるを得ない<sup>(1)</sup>。  
 チェザール・ロンブローゾやその多くの常連との交流、例  
 えばそこでモスカはロンブローゾの女婿、歴史家のグリエ  
 ルモ・フェルレーロ——彼をローマに召くため、実らなかつ  
 たとはいえ、モスカは粉骨碎身の努力を払った——、ブリケ  
 ラジオ出身の自由貿易論者、平和主義者、繊維工業家である  
 エドアルド・ジレットティ、そしてモスカ自身より少し遅れて  
 トリーノにやって来た本稿の筆者と規則的に会ったのだが、  
 こういう交流はモスカにとって汲めども尽きぬ友情の源であ  
 っただけではない。この交流は純精神的な関連でも保守的な  
 知識人達にとって有意義であった。このロンブローゾ・サー  
 クルは、全く急進的で超近代的な理念で満ちていた。ロンブ  
 ローゾ自身、国会議員選挙に社会党から出馬する決心をした。  
 モスカの保守主義は、確かに彼がロンブローゾ荘で体験した  
 社会主義者との多面的かつ直接の接触やその雰囲気によって  
 厳しい試練に晒されたものの、勿論微動だにしなかった。  
 彼は本来のモスカであり続けた。そのことは、自分自身とそ  
 の社会主義者の友人達に対して等しく明白に証明済みであつ  
 た。しかし彼は、他所では接することがなかったであろう多  
 くの事どもをここで耳学問したのである。

(1) 拙著 *Bedeutende Männer. Leipzig 1926, Quelle. S. 81 ff.*

\* \* \*

ところで政治理論の実践的応用に対する欲求は彼を一時も  
 休ませはしなかった。一九〇〇年から一九〇九年まで彼は北  
 イタリアの有力な日刊紙イル・コッリエレ・デラ・セーラに  
 編集者として加わった。一九〇九年シチリアのカッターモ選  
 挙区で下院議員に立候補し当選した。

ガエターノ・モスカの政治活動の豊かな成果は、一九一四  
 年初頭(三月)、植民地担当次官への任命となって結実した。  
 学識と国家的力量のために、再建された帝国の開始を主宰  
 するという任務は彼にはおあつらえ向きのものであった。こ  
 の地位に彼は一九一六年まで留まったのだが、丁度その間に  
 世界大戦が彼を襲ったのである。モスカは無条件の戦争支持  
 者ではなかった。彼の該博な歴史的知識は彼に、参戦によつ  
 てイタリアが見舞われるであろう危険性のすべてを予知させ  
 た。他方で彼は同じ理由から、イタリアの中立はいずれその  
 国際的地位にとりかえしのつかない傷をつけることにならう  
 し、そうすれば東北地区未回収地の民族的問題の解決は永久  
 に引き延ばされるであろうということも知っていた。こうし  
 て戦時中彼はサランドラ内閣の下で委ねられた地位に留まっ

たのである。彼は、極度の憎悪にもとらわれず、人間と事物を判断する際、客観的、科学的明晰さを失わない数少ない人間の一人であった。

一九二三年モスカの人生における北イタリア時代は漸く終りを告げた。一九一九年以來国王よりニッティ内閣下の上院議員に任命されていたモスカは、一九二三年一月、ローマ大学への招聘を受け、法学部で憲法史並びに政治学説史 (Storia delle Istituzioni e delle Dottrine Politiche) の講座を任せられることになったからである。

\* \* \*

モスカとファシズムとの不和は不思議に思われるに違いない。先述した選挙権問題における彼の立場——彼は極右の立場を一人堅持した——、いかなる大衆支配も不可能とする教義、政治階級の存在の教義、国家権力の起源は暴力であるとする教義、その他彼の体系的中心的位置を占める諸教義は、モスカをファシズムの旗手、大立物として予め決定づけていたかのように思われたからである。だがそれは当を失することになった。このシチリア人国法論者のファッシ<sup>(1)</sup>に対する姿勢の源泉は非常に複雑な性質のものであろう。ここではこの重要な個性とその全業績を理解する上で必要と思われるほ

んの二、三の点を手短かに暗示するに留めたい。その一つは、ファシズムが権力奪取の当初から議会人と議會——結局モスカも議会人だったのだが——に対処したその粗野なやり方であろう。<sup>(2)</sup> 法学者としてもモスカはファシズムに反対した。最も重大な対立点は、思うに次の点に存した。即ち、ファシズムは、新しい、社会的にも極端に混成的な階層の人間を権力中枢に召き入れたのだが、その際、それまでの支配階級であるブルジョア知識人——リソルジメントは彼らのおかげであったし、その道徳的習慣をこの国法論者は誇りにし、自らの愛国的希望を託してもいたのだが、彼らは戦後の崩壊現象に立ち向うことが出来なかった——を手荒く押しつけ、ほとんど復讐の希望すら無い状態にしてしまったこと、これである。というのもこの点に西欧的民主主義とイタリア・ファシズムとの主要な相違点の一つが存するからである。前者は諸政党に結集した多くの「エリート」間の抗争に基づき、権力は彼らの持ち回りで替る替る行使される。それに反して後者は、安定的、エリート主義的に、人脈に従って統一的に打ち固められているし、永続的である。ムッソリーニに対する古い自由主義的政治家の敵愾心の大部分は、この展望の無さに帰因するのである。

(1) Quintino Piras (Battaglie Liberali. Profili e Discorsi di B. Croce, G. Mosca e F. Ruffini, Novara 1926, gaddi, S. 114) の挙げた理由はあまり説得力をもたないし、断然不十分であらう。

(2) これは私が特に「ローマ大学における政治学講義」Lezioni di Scienza Politica all' Università di Roma (Milano, Ist. Ital. Scientifico, 1927) で論じたことだ。

\* \* \*

モスカと外国との私的な関係は一貫して薄いものだった。モスカは、その深淵かつ高貴な意味においてシチリア人であり、そのため、北イタリア人気質を同化することからして、彼には膨大な適合力の投入を意味した。フランス的、イギリス的、ドイツ的なるものと学問的にかかわり合うためには、モスカには、なるほど前提となる心理的透徹力や善意において欠くところはなかったのだが、時間と閑暇が欠いていた。彼はまた減多に外国旅行には出なかつたし、出たとしても回数と同僚の平均を下回った。一九二三年五月、彼はバーゼルの学生団体、統けてツェーリッヒのそれから招待を受け、「バーゼルの」博物館の講堂では、マキアヴェルリとボテロに関する優れた講演を行った。以下に、この学者の国家学上の発言の本旨を知ってもらうために博物館が公表したものか

ら、興味ある核心部分を抜粋して再録しておく。

「マキアヴェルリを理解するためには、一方にイタリアの文化的、精神的、芸術的優越、他方にイタリアの政治的分邦制と無力、この両者の間の著しい対照を思い浮かべる必要がある。イタリアを軍事的にも政治的にもそれに相応しい水準にまで高めることのために、マキアヴェルリは己れの使命を視ている。イタリアは貴族層 *signore* (支配層) と寡頭制的な商人の共和主義者とに分たれ、前者は貧欲で落ち着き無く、後者は怠情のために平和を好んでいた。双方とも自らの戦争を、ほとんどは同国人ではなく外国人よりなる、いかなる国家とも精神的繋がりを有しない有力な職業的隊長の指揮に服した軍隊 (*compagnie di ventura*) を使って行った。ここから、ミラノのスフォルツァのように隊長が国家の支配者を僭称するまでに至るという危機が絶えず生じた。

しかしながら最悪なのは、分裂したイタリアに対する外国の支配欲の触手であった。事実他ならぬマキアヴェルリの時代のイタリアは、フランス、スペイン、そして「神聖ローマ帝国」皇帝の陰謀と侵略の舞台であった。こうして

マキアヴェルリの胸に祖国の独立という計画が熟してきたのである。その際は、古代ローマの著述家の博覧強記（そこから彼に独自の火器の意義の誤認が出てくる）からおそらく必要以上の刺激を受けたのである。彼はその著述家のうちに、将来の全発展の根本を読みとろうとした。

それに対応してマキアヴェルリの国家論は基本的に二つの要因に基づいている。一つは国民軍創出の必要性という教義、もう一つは君主の理論である。おそらくサヴォナローラの運命の考察から生れた、歴史上、預言者は、自ら武装していなければ常に没落の憂き目に会ってきたという経験律（武装せざる預言者は没落する i. profeti disarmati periscono）から出発しつつ、マキアヴェルリは君主論を発展させた。それは、有徳をみせかけること、自ら行う行動も他者に行わせる行動も合目的性の観点からのみ決すること、強力な国家建設のためにはいかなる権謀術数、いかなる暴力行使をもためらってはならないこと、という勸告において極まった。

それは善き仮象と善くない実相 (sembare, non essere) の理論である。モスカはこのマキアヴェルリの理論の核心を、たとえ道徳的観点を度外視するとしても、心理学的に

は誤りであるとした。何故なら、偽装の術を教えることは不可能であり、いわんや学ぶことは一層不可能であるからと。もしかしたらこの点でモスカは若干樂觀的過ぎたかも知れない。決して騙し得ない、心から善良な人間というものが存在する。わざわざルンペン稼業を習得する必要の無いルンペンというものも存在する。確かにその通りである。しかし、これがほとんどだろうか、両者の中間で、弱い性格の、半分は天使で半分は悪魔であるような人間も存在するのである。彼らにはより邪悪な勸告の方が有効であろう。しかし、他方ではモスカも正しい。同胞を騙すためには生れつきの知能が必要である。すべての君主がそれを育んでいるとは限らないからである。

ピエモンテ出身でマキアヴェルリよりほぼ一世紀後に生きた高識の持主、ジョヴァンニ・ボテロに移ると、講演者は先ず、外人兵士の活用に反対したという二人に共通の要因に注意を喚起している。その他の点では彼は、正当にも二人の国家哲学者の間の二重の相違点を強調した。両者の内ボテロの方がより穏和、より近代的であったこと、彼が宗教的感性、臣下の顧慮、貴族と平民との媒介を君主に切に推奨したということは疑い無い。またボテロは基本的に

もう一つの課題を自らにした。権謀術数と暴力による国家権力の奪取よりも、慎重と自重によるその保持の方が大切であるように彼には思われた。というのも、権力奪取だけなら冒険家にも成功することが出来るからである。国民経済学的観点からもポテロはマキアヴェルリより重要である。『国家理性論』(一五八九年)等の中でポテロは、一民族の富は貴金属鉱山の存在の如きものではなく、活発な商業と貿易に存すると指摘した。それは、後に(一六一九年)ナポリの偉大な重商主義者アントーニオ・セラが国民経済学説史上で有名になった論文のテーマにした命題であった。

最後に講演者は、自分が詳細かつ歴史的蘊蓄を傾けて論じた二人の歴史哲学者に対し、後代の人々は何故にかくも異った構えをとるのか、という問いを立てている。その原因をモスカは愛国的感性に求めている。それによって現代のイタリア人はポテロの内にスペインの覇権の教権的夢想家を、マキアヴェルリの内には、それとは反対にあらゆる犠牲、もしかしたら故郷フロレンスの犠牲さえも覚悟した偉大なイタリアの愛国者を視るのである。それにしても、後代の人々がマキアヴェルリを判定する際忘れてはならな

いことが二つある。一つは彼の個人的生涯に於ける清廉潔白である。マルクスは後に、私はマルクス主義者ではないと自ら言わねばならなかった。同様に一人の人間の生涯としては、マキアヴェルリはマキアヴェルリストではなかったと主張しうるであろう。第二に、マキアヴェルリには、自らの見解を表明する際のこのうえない誠実さと率直さを認めてやらなければならない。それによって彼は、フリードリッヒ大王、つまり皇太子の時はこのフロレンスの書記に対する倫理的反論を物しておきながら、王位に就くや否や、自ら論難した理論に最大限従うようになったフリードリッヒ大王のような多くの批判者を遙かに抜きん出ているのである<sup>(1)</sup>。

(1) Basles c Vachrichten vom 11. Mai 1923, I. Beil. zu Vr. 215.

ガエターノ・モスカは一九一九年パリの国際社会学会(会長ルネ・ヴォルム)の会員となり、少し後れてドイツ社会学会の客員会員に指名された。

しかしながら、モスカの精神構造は本質的にイタリア的であった。そのことは、政治の科学的処理という分野における

イタリヤ人の業績の質に鑑みても決して欠点とはならない。彼はフランス人を知っており、尊重もしている。歴史的、政治的天性と鋭い現実感覚の故に、彼は元々ドイツ人よりもイギリス人に近かった。<sup>(1)</sup>特にその『憲法論』*Appunti di Diritto costituzionale* では、モスカはイギリス憲法史の優れた概説を呈示している。にもかかわらずひとはエッケルトと共に、モスカはドイツの国家経済学者については知らないか不十分にしか知らない、と難することが出来る。というのも、若い学者は別にしても、モスカは、ホルツェンドルフについてはほんの序でに触れるだけであり、ラウマー、ドロイセン、ロッシヤ、そして接点は多様にあつたと思われるトライチエケに至つては、ほとんど何も述べていないからである。勿論、スペインサーとその学派にも充分な考慮は払われていない。

(1) Piras, *Battaglie Liberali*, I. C. 110.

(2) モスカの『政治学』要綱』の第二版の書評を参照せよ。

Kölnner Vierteljahrsheften für Soziologie 1924, III. Jahrg., Heft X. 頁掲載。

その多面にわたる傾向、それにも増して大胆で挑戦的な資質に相応しく、モスカは元来生産的な著述家ではなかった。その人をそらさぬ優れた能力とすばらしい話術にもかかわら

ず、むしろ狭い範囲内で示された寛ぎによって彼は貴重な話相手となり、真実の献身的な友情に対する深い感受性によって彼は類い稀な友となつた。彼の伝記は太陽のように輝く明るさと透明さに満ちているのである。